

## 「京都をめぐる俳句のあれこれ」

小長谷亜紀

最近ではテレビ番組「プレバト!!」の影響で、俳句の面白さに関心を持つ方が増えています。この図書館報でも俳句コーナーがあり、私もそれを楽しみにしている一人です。

東京から京都へ異動したのを機に、私が俳句の世界に足を踏み入れて2年がたちます。まだまだ初学者ですが、月に1度の吟行（俳句の題材を探しながら戸外を歩くこと）と句会を通して、その奥深い世界に遊んでいます。

ご存じの通り、俳句は季語を入れた5・7・5の短詩です。この原稿を書いている今は立春（2月4日）、真冬の厳しい寒さにあって俳句の世界ではもう春の季語を詠みます。神社では梅がほころび始め、仕事を終え外へ出るとずいぶんと日脚が長くなったと感じます。季語を調べる際に必要なのが、俳句の参考書ともいえる歳時記で、春・夏・秋・冬・新年の5つの季節の季語を解説し、代表的な例句を挙げています。例えば、「時雨」という冬の季語。これは冬の初めに降るざっと降ってはすぐに止み、そうかと思うとまた降り出す雨のことで、京都のように山がちの場所で見られるため、「北山時雨」ともいいます。時雨が表現するのは、はかなさや物悲しい気持ちです。

「時雨」と同様に、歳時記は京都固有の祭りや歳事、気候や風光を示す言葉が中心となって作られています。季語の歴史を見ると、平安時代に和歌に詠む代表的な季の題（花、郭公、月、雪、紅葉）が成立します。それに続く中世の時代に、季の題は和歌から派生した俳句の前身である連歌に引き継がれて拡大しました。連歌は和歌の上の句（5・7・5）と下の句（7・7）を複数の人が交互に詠み合いますが、そのもっとも初めの句（発句）には季語を入れる決まりがあったのです。

京都で学生生活を送り、その後も京都の句を多く詠んだ俳人に高浜虚子がいます。中田余瓶編「虚子京遊句録」という句集には、130か所以上もの京都の名所とそこで詠まれた句が年代順

に編まれていて、興味深いです。その中で大原の時雨を詠んだ句を紹介しましょう。

寺の傘茶店にありし時雨かな（昭和6年）

茶店にお寺の傘がたてかけてあるのでしょうか。お参りに来た人が茶店で時雨をやり過ごしているのか、誰かの忘れ傘なのか…何気ない光景から色々な想像がふくらみます。春の都踊、壬生狂言、夏は賀茂祭に祇園祭、秋の五山の送り火、地藏盆、冬は大根炊、南座の顔見世、新年は十日えびす、三十三間堂の弓始め…季語を身近に体験でき、その温度感を俳句に詠める京都は本当に素晴らしい街です。

年末に発表される新語・流行語大賞には、世相を現した新しい言葉が登場し、その後広く定着する言葉も少なくありません。歳時記には現在も新しい季語が加えられ、反対に消えゆく季語もあります。気候現象も年々変化しています。旅行や出張先で異国の景色を詠むいわゆる「海外俳句」も増え、従来の季語では表現しきれない情景も出てきます。季語は今後も生まれ変わっていくでしょう。

最後に俳句と外国とのつながりについて。日本の俳句文化をより深く、広く海外へ紹介したのは、イギリス人文学者のR.H.ブライス（1898～1964）でした。ブライスは終戦翌年1946年の昭和天皇の「新日本建設に関する詔書」の起草に携わった人物で、師である仏教学者の鈴木大拙と共に禅の視点を通して古典俳句を論じました。著書「俳句」（1949～1952）は全4巻の大著で、アメリカのビートジェネレーションの詩人たちに大きな影響を与え、その後英語でハイクを詠む動きが広まりました。ハイクは、5・7・5にはとられない2～3行の短詩で、今ではさまざまな外国語でも詠まれているそうです。外国人が自然を詠んだ短詩とはどんなものなのか、機会があれば読んでみたいと思っています。

こはせ あき（丸善雄松堂株式会社）